

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 玉村 恭

本論文は、世阿弥の能楽論について、芸術論としての体系的な解釈を提示した論文である。世阿弥研究においては、文献学や能の社会的文脈などに関わる研究で多くの成果がもたらされているのに対し、その思想内容や解釈に関わる美学、芸術学からの研究は近年十分に展開されてこなかった。本論文はその欠落を埋めるべく、世阿弥の理論的著作に芸術論として正面から取り組み、役者、作者として上演の現場に身を置いていた世阿弥の演技や作品のあり方についての考え方を体系的に示そうとしたものである。

本論の根幹は、役者である世阿弥が、最大の関心事であった魅力的な上演を可能にする条件としてもちだしてきた〈花〉という比喻の考察にある。〈花〉についてはこれまでも様々な考察がなされてきたが、本論の要諦は、〈花〉が演者や作品そのもののうちにあるのではなく、観客など、その場を形作るすべてのものが和合することでおのずから「出で来たる」のであり、役者にとって大切なのは、そのような場に積極的に参入して和合を実現させるプロセス自体であるという、一種の「関係性の美学」を世阿弥が提唱しているというテーゼである。その上で本論では、この考え方をふまえることで、演技、作品、観客、教育といった各局面に関わる世阿弥の論にいかなる解釈が可能になるかが検証される。たとえば、作品に関しては、世阿弥がその形式の中心的な理念に据えた〈序破急〉が、途中で山場をつくり、一定のまとまりを確保すれば、あとは人為を離れ、〈おのずから出で来たる〉ものとして自然物に近づくことを理想とする考え方として再解釈される。

本論の最大の功績は何と言っても、難解とされ、時として局所的な取り上げられ方をされるにとどまってきた世阿弥の理論的著作を、ひとつの体系をなすものとして再構成したことにある。それを可能にしたのは大小様々なテキストを視野に入れた綿密なテキスト読解であり、そのことは、「秘すれば花」、「初心忘るべからず」といった人口に膾炙している文言を本来の文脈に戻して再解釈することに成功したというような副産物をも生み出している。他方で、このような綿密なテキスト解釈の成果は、世阿弥解釈の枠をこえた広がりをもち、現代のパフォーミング・アーツの様々な実践にも通じるような示唆を与えるものとして世阿弥の思想の現代的な意義を明らかにしている。それを可能にしたのは、世阿弥が役者という現場の人であったということにあくまでもこだわり、その「原点」にたちかえった見方を徹底的に貫こうとする本論の姿勢であったと行うことができよう。

体系性を重視するあまり、世阿弥の思想の時期的な変化が十分に論じられていないといった問題もないではないが、今後の世阿弥研究のモデルともなりうる全体像を提示しえた功績と比較すれば、大きな瑕疵とは言い難い。以上をふまえ、本審査委員会は本論文を、博士（文学）の学位を授与するにふさわしい論文であると認定するものである。